

玉川上水・野の花だより No. 1 7

花菖蒲（ハナショウブ）

中央大学研究開発機構・機構教授 東京大学名誉教授

石川 幹子

2026 年 6 月 14 日

玉川上水・大山緑道では、梅雨に入り様ざまの野の花が咲いています。「野の花だより」は、二週間ほど、間があいてしまいました。申し訳ございません。

6月2日、渋谷区の花、「花菖蒲」（ハナショウブ）の蕾がふくらんでいました（写真1）。6月3日の朝は、紀伊半島に上陸した台風が東京を横断し、大雨と強風となり、被害を受けているのではないかと、おそろおそろ、夕方にかけてみましたところ、藍色の花菖蒲が見事に開花していました（写真2）。三河八幡という名前の花菖蒲です。その後、次々に咲き、6月7日に開催された「おとなりサンデー」でも、多くの皆様楽しんでいただくことができました。

一般に、花菖蒲は湿った土地でないと生育できないと思われていますが、そうではありません。乾いた土地でも十分に生育します。湿地や水辺でないと生育できないのは「カキツバタ」で、対照的に「アヤメ」は、乾燥した日当たりのよい草地でなければ生育できません。

花菖蒲には、江戸から続く長い物語があり、「心優しい日本の文化」が息づいています。その一端を、御紹介いたしましょう。



写真1 花菖蒲（2026年6月2日）



写真2 花菖蒲（2026年6月3日）

<参考：花菖蒲物語・堀切菖蒲園>

この写真は、葛飾区にある「堀切菖蒲園」で、江戸の伝統が継承されています（撮影 2026 年 6 月 4 日）。文化年間（1804～1817）、堀切村の小高伊左衛門が、現在の築地にあった松平定信が作庭した名園「浴恩園」から、品種を譲り受け、育成を行い、花の名所に育てたと伝えられています。明治期には、複数の菖蒲園が開園しましたが、関東大震災、戦災等により衰退し、1959 年、東京都が堀切園を買収し都立堀切菖蒲園として公開されました。1975 年に葛飾区に移管され、丁寧な管理が行われ今日に至ります。無料で公開されています。



図1 歌川広重：「名所江戸百景 堀切の花菖蒲」 安政4年（1857年）

図2 喜齋立祥（二代歌川広重）：「東京名所三十六撰 二十 東京堀切花菖蒲」 慶應2年

＜参考：花菖蒲物語・浴恩園～菖翁～堀切菖蒲園～明治神宮内苑＞

老中・松平定信は、「寛政の改革」で有名ですが、身分の差を超えて「士民共楽」の場となる、今日の「公園」に相当するものを、1801（享和元）年に創り出しました。当時、藩主をつとめていた奥州の白川の「南湖」です。「南湖」という名称は、李白の「南湖秋水夜無煙」によるもので、湿地を改良し、堤を築き、領民のために新田開発をおこない、池を巡り、17 景を配した庭園をつくりました。今日でも、多くの人々に愛されています。

松平定信の下屋敷のあった地が、現在の築地で、ここに定信は、池泉回遊式の名園、「浴恩園」を創り出しました。図は、国会図書館に残されているもので、「春風の池」と「秋風の池」の二つの潮入りの池から構成されています。春秋の樹木や野草が取り入れられており、花菖蒲やアヤメも鮮やかに描かれています。

浴恩園は、現在でも築地市場跡地に残っており、東京都旧跡に指定されていますが、再開発の波に直面しています。



『江戸浴恩園全図』1884（明治17年） 国会図書館デジタルコレクション



花菖蒲（拡大図）



アヤメ（拡大図）

花菖蒲の品種改良に取り組んだのが、旗本・松平定朝で、60 余年にわたり品種の改良を行い、江戸の園芸文化に多大な功績を残しました。定朝は自らを「菖翁」と名乗り、1857（安政3）年には、『花菖蒲花銘』を執筆しています。定朝の作出した品種を譲り受けたのが、堀切で後に小高園を営んだ小高伊左衛門で、この伝統を今日に継承しているのが「堀切菖蒲園」です。

明治神宮内苑の「菖蒲田」は、明治30年頃、明治天皇の思召しにより、病弱な昭憲皇太后のために井伊家時代の水田跡につくられました。武蔵野の落葉広葉樹林に囲まれた菖蒲田は、景観的には美しいものでしたが、花菖蒲の開花には日照が不十分である等、課題が山積しており、文献調査を行い、堀切菖蒲園の実査等も行ったと記載されています（参考：『明治神宮境内総合調査報告書、昭和55年』）。今日では、海外からも多くの人々が訪れる名園となっています。



明治神宮内苑 菖蒲田 2026年 6月4日撮影

このように、花菖蒲は、世代から世代へと受け継がれてきた

「心優しい日本の文化」を
今日に伝える、かけがえのない花である
ことがわかります。

